

臨濟宗・俳諧浄土正覚寺 歴史と散策案内

平成二十七年六月作

一、正覚寺の歴史と御本尊

○開山雲潭玄蔭大和尚

- ・嘉慶元年（一三八七）真言宗より禅宗に転派した。足利尊氏の次男・基氏鎌倉公方に成るのが貞和五年（一三四九）で、貞治六年・正平二十二年（一三六七）死去。京都では足利義満が応安元年（一三六八）第三代將軍となる。足利義満（鎌倉公方・足利氏満代）の時代に創建されたと考えられる。
- ・開山雲潭玄蔭和尚、嘉吉元年（一四四一）六月十五日示寂である。この時、嘉吉の変があり六代將軍足利義教、赤松満祐に殺されている。
- ・正覚寺開山の生きた時代は、京都では、応永元年（一三九四年）第四代將軍は義持となった。また、第三代將軍足利義満は応永十五年（一四〇八）に没した。鎌倉では第四代公方の足利持氏と対立し、離反した上杉禅宗の乱が応永二十三年（一四一六）起っている、これらの時代を生き抜いている。

*小田原衆所領役帳

- ・永禄二年（一五五九）、後北条第三代・北条氏康により作成された家臣に対する軍役賦課台帳「小田原衆所領役帳」には、津久井衆五十七人の中に「正覚寺」が記載され、千木良善勝寺と共に寺の記載は二カ寺のみである。
- ・正覚寺は後北条方の為、後北条氏と武田信玄が戦った永禄十二年（一五六九）の三増合戦で信玄が勝利したが、信玄帰陣の際、お寺を焼かれていた。この場所は「古屋敷」と言われ、その後、所領役帳にも記載されている山口雅楽介の開基で山口家墓地傍に寺が再建された。しかし、宝暦年間火災に再び遭い現在の場所に移転再建された。火災に遭った場所は「元屋敷」と呼ばれる。
- ・三増合戦で勝利した武田信玄は帰陣の際、現在の正覚寺前の道祖神・石仏群の前の道を通り甲斐へ帰陣したので、これを古来より信玄道という。

○御本尊 木造・聖観世音菩薩

*名付観音

・行基菩薩御作 像高六十七・三センチ 造立年代南北朝時代(十四世紀)
・正覚寺の檀信徒や縁のある方から依頼されると、産まれた赤子に名前を授ける観音様として、また、病氣平癒の観音様として昔から信仰されて来ています。

*津久井三十三所観音霊場

・二百五十年程前の宝暦年間、津久井寺沢(現緑区根小屋)の雲居寺・大雲禅無和尚(建長寺第二百二世住持)が発起して自坊の寺を第一番にし、臨濟宗・真言宗・曹洞宗の寺で、観音様を安置されている寺やお堂に呼びかけ、津久井三十三所観音霊場を開設する。
・西国・秩父・四国の百観音霊場へは、当時、一般庶民にとつては費用や時間的余裕も無く霊場参拝が難しい為、この地津久井に観音霊場を開設されたと云われる。尚、現在は加入寺院も増え四十三ヶ寺と成つた為、古来の津久井三十三所観音霊場は「津久井観音霊場」と呼称を変更されている。
・御開帳は六年毎の御開帳で、午歳が本開帳、子歳が中開帳である。御開帳期間は本開帳は五月十日頃から月末迄、中開帳は五月十日頃から二週間が一般的である。

観音霊場津久井札所は花六分 十九巢

*第十五番と第十三番札所

・第十五番正覚寺は霊場参りに於いて当時より「中番」と言われ、御開帳に際しては六年毎の御開帳であり、当時は時間的にその御開帳期間で全ての三十三か所を参拝できない事もあり、第十四番迄その年は参拝し、次の御開帳の時、第十五番の正覚寺から霊場廻りを始める為、正覚寺は「中番」と言われている。

愚痴無知の衆生済度の大智山不取正覚の誓い頼もし 第十五番御詠歌

・第十三番宝珠庵、津久井湖ができる前、道志橋下にあった沼本部落に臨濟宗宝珠庵と言う第十三番の札所があった。この寺は津久井湖(昭和四十年、一九六五年完成)の造成で湖底に沈み、古来より正覚寺との御縁で正覚寺に合併された。その為、正覚寺には第十五番札所の聖観世音菩薩と第十三番札所・宝珠庵の十一面観音菩薩が安置されている。

沼本の川波澄ます宝珠庵浮世の塵を洗い流して

第十三番御詠歌

○西行の歌碑

*正覚寺の裏山一帯を「間の山」と称し、別に「嵐山」とも言われている。嵐山は今より千百年前、大和の隆弁僧正が此の地に遍歴の際、山城の嵐山に似たるとしてこの名を附せりとあり、西行法師はこの嵐山に憧れ、歩をこの「間の山」にすすめしものと言ふ。正覚寺本堂に掲げる額裏面にこの消息を伝える文面あり。「西行は天台宗の僧、一名歌僧とも云われ、号を円位、俗姓佐藤、名を義清、鎮守府將軍・藤原秀郷の孫にして左衛門尉康清の子なり。後鳥羽上皇に仕えて北面の士となり……中略……のち吾妻に下向の折、將軍頼朝これを聞き、人を遣わして西行を鎌倉に召す。和歌、弓馬の事問わるるに、西行辞する事を能わず、通宵大いに談ず、頼朝感謝して愛玩の銀猫を贈る。西行これを受けて門前に出ずるや、路傍の兒童に与え呉れ去る。全く人口に膾炙する所にあらず、西行法師常に謂うらくは、『凡そ密教を学ばんとすれば和歌を学ぶべし、さらではその奥旨を悟り難し』と、師の和歌に対する意見なり。それより鎌倉を辞し、かつて大和の隆弁遍歴のみぎり、山城の嵐山に似たるとして、その名を附すせりという間の山に歩を進めて、『吾妻路や間の中山ほどせばみ心の奥の見ゆばこそあらめ』の一首を詠じ、佐賀の大覚寺に横し、字義を同じうする正覚寺に投宿し云々とあり。

吾妻路や間の中山ほどせばみ心の奥の見ゆばこそあらめ 卍家集』の恋歌

*此の間の山から相模湖・藤野地区方面には、相模川（桂川とも云う）が流れ京都や奈良の景観と似ているところがあつた様で、地名嵐山の他に隆弁僧正遍歴の時か、西行が名付けたか定かではないが、吉野、日野、奈良本、大原に擬し小原、八瀬に擬し与瀬等の地名が残存している。

*最近、当寺へ西行愛好家の訪れる所となり、西行法師の歌碑も永い眠りから覚め、写真撮影、拓本にと時代の脚光を浴びるに至っている。拓本を取って見ると、右の歌碑の文字が蘇ってきます。又注意深く石を見ると、かな文字が幾つか読む事も出来ます。

*現在は枯れてしまつたが五百年の大樫が境内にあり、その根元には西行の歌碑を刻んだ、高さ二m二十cmの長方形の子持ち石がある。その脇には西行の腰掛たと云う「西行法師腰掛石」もある。

*「間の山」は昔、甲相州の往来の要害地で、奇岩怪石のある石老山と小仏峠の間に位置し、戦国時代は山城で狼煙台も置かれ、特に後北条の甲斐武田氏の動向を探る連絡網としての役割もあつた。

二、正覚寺と狸和尚伝説

*建長寺の山門は元禄一六年（一七〇三）十一月二十一日の大地震で倒壊。その後、建長寺の山門建立計画は宝暦八年（一

七五八)、化縁比丘・天源庵萬拙碩誼和尚によって本格的に開始された。安永四年(一七七五)六月には再建となったが、鎌倉建長寺の山門再建建立に関わる狸和尚の話は各地方に逸話、伝説として残されている。当寺正覚寺にも「狸和尚伝説」の話が遺されていて、その伝説に関わった山門化縁主である第二十一世建長寺住持・萬拙碩誼和尚の掛軸や、当村名主であり正覚寺の檀信徒に、山門建立の為の注木樫を請け負わせ、相模川の水運を利用して鎌倉へ搬出する事に関係した古文書、更に、「狸和尚の化首」等の伝説が共に伝承され来ている。

・正覚寺には山門建立化縁主・萬拙和尚が書いた掛軸があり、山門建立の為、確かに正覚寺へ立ち寄り止宿し、その御札として書かれたものである。その内容は慈明和尚と云う中国の禅僧が厳しい修行の時、座禅中睡魔に誘われると「錐」を身体に刺して眠気を絶った言う禪語の書である。「萬拙」

・正覚寺へ山門建立の為、萬拙和尚が勧進に来た証拠と言うべきものが正覚寺檀徒の家に残されている。これは当時若柳村の組頭・市郎右衛門宅へ来た時の物で「音物(土産物)」と言われ、止宿や人馬手配、寄進をしてくれた村役人に対するお礼である。縦十二センチ、横四センチの小さな掛軸で「南無大聖不動明王 建長萬拙七十三翁拜書」とあり、火伏の御守札であろう。

*狸和尚伝説

『二百五十年程前の明和年間、鎌倉の建長寺の住職、萬拙和尚という偉いお坊さんが、地震で倒れた山門を再建するために勧進と言つて寄付金募集の旅をしていた。この和尚が山口の正覚寺へ立ち寄ったのは、津久井の峰々の雪も解け始めた春のことであった。正覚寺へ宿泊した和尚はこの地に山門柱木の適材があることを聞き、早速不足分の七本を求め村々を回ると無事調達することができたので、ひとまず建長寺へ戻る事となった。ところが疲労からか和尚は変えろとすぐに病気になるてしまい、それから先の勧進を続けることができなくなりました。このことを知つて喜んだのが建長寺の裏山に五百年も住んでいるという古狸、「これはシメタ」とばかりに、さうそく萬拙和尚に化けて勧進に出かけることになった。鎌倉から藤沢と進み、伊勢原、厚木を経てついに津久井正覚寺へ着いたが、正覚寺に泊まらず、義海和尚には簡単な挨拶をしただけ、次の投宿場、甲州街道小原宿の本陣へと向かった。本陣へ着くや出迎えの者に「わしは犬は嫌いなので、ないでおかしやれ」と命じたり、女中からお風呂を進められても、「いや、風呂は余り好まんので」と断つたりするばかり、女中が「でも、道中汗をおかきに成つたでしょうから」となおも進めると、「では、ただかこうかな」と、しぶしぶ腰を上げたが入る真似をするだけ。さらに、「晩飯を召しあがれ」と女中が御膳を運んでいくと、「御給仕はいらんので、そこへ置いていかしやれ」というばかり。女中は手が掛からなくていいと思う反面、何とも言動が奇妙なので不思議に思っていた、どうも人氣を嫌がついているようす。翌朝、もっと驚く事があった。女中が床を上げようとすると、和尚の寝た布団には獣の毛がたくさん着いていたのである。女中が「どうしたものか」と思っていると、そこへ、次の投宿先の多摩の法林寺と

いとお寺から迎えの寺男がやつてきた。そこで女中はその寺男にこれまでの奇妙な出来事を、そつと耳打ちして和尚を送り出した。法林寺に着くと、和尚の言動は女中から聞かされたとおり奇妙なもので、寺中の者が怪しんだ。そこで何とか正体を見届けようと、先ずお風呂を進めた。すると風呂に入ったものの、あまりにも静かすぎるので、寺男が湯加減を尋ねると「いいあんばいじゃ」と答えながら「ポチャポチャ」と音をたてている。何とか中の様子を覗いてみようかと、羽目板の穴から覗くと、寺男は驚きのあまり思わず声を上げそうになつてしまつた。何と体中に毛が生え、風呂のふちに腰を下ろして尻尾でお湯を叩いていたのである。晩飯の時も、小原本陣と同じように「ついていなくてもよいので、終わればよぶでの」と、寺の女中を追い立てるようになつた。だが機転を利かして女中が襖をピシヤリと強くしめ、跳ね返つて開いた隙間から覗いてみると、これは大変、御膳の上に飯をあけ、汁をかけて「ベチャペチャ」「クチャクチャ」と食べている。いよいよ、これは狸か狐かが萬拙和尚に化けているに違いないということで、夜中、和尚が便所へ行くのを待つて犬を放つたからたまらない、「ギヤアッ」という悲鳴と共に犬にかみ倒され、そこを寺男が山斧でバツサリ首を落としたのである。寺男はその首をすぐさま箱に入れ、鎌倉の建長寺へ行こうとしたが、「首をあらためてもらふなら、何も鎌倉まで行く事はない、正覚寺の和尚に見てもらえば分るだろう」と言う者があり、さうそく、山口の正覚寺へ籠に乗せ出向くことになつた。さて、法林寺の寺男が持参したその箱を、正覚寺の義海和尚が「それは苦勞、さあお集まりの者もご覧じろ」と開けて見ると、誰も息がとまるほど驚いた。なんと、それは一個の人面石と化していたのである。なににな、「それは本當の話か？　じゃと……本当じゃと」と、それが証拠には今も正覚寺にはその化首が遺つているんじや、目が窪んだ石の鬨體のような「狸和尚の化首」が、正座してその首を持ち上げようとしても、どうしても持ち上げることが出来ないほどの重さなんじやとさ……おわり。』

○建長寺山門柱請負の古文書

以書付申上候

一先達而申上候鎌倉建長寺様山門柱木拾式丁御用内式丁出来、拾丁御入用二付拙寺方江右之木元見立致世話候様、度々御役中へ被仰遣候、仍之伐出シ可相成候へ、注文を以直段相定メ伐出シ可致之旨、正覚寺方拙者方江有之候二付、鎌倉御役中江罷越シ左之趣得御意候得者、正覚寺同道二而参り直段等可致注文之様被御申渡罷歸り、木元ヲ見立正覚寺同道罷越直段注文仕候所、尤拙者請負へ金子拙者方二而仕入仕り、油井之浜着二而代金御請取申候、又八山入り之節方入用次第二相定候金数之内、度々二御渡被遊候而世話御請合二被仰渡候へ八直段少々下値二相成申候、何れ二なり共御勝手宜敷方二御定メ可被遊旨申上候へ、金子山入り之節より入用次第段々御渡可被成之定二而油井之浜着仕、右注木拾丁代金百三十兩、但シ老丁二十三兩積り之證文下書差出候へ、直段御意二入早速正覚寺立合之加判證文二而拙者方江伐出世話請合被仰渡候、併右拾丁之内二而老丁江戸方寄進之心当り有之間九丁二可成哉、冬中承り届ケ候而來春可申出候、本證文二者木数金高者仕間敷候様被仰聞候、依之木数金高不仕、但シ老丁二拾三兩積りと仕差置申候、來春二罷成木元買定之時節、飛脚ヲ以申遣候へ、弥々寄進有之九丁二相

定候、其心得ヲ以木元買定可申旨被仰遣候、右之通木數木元買定、内金等相渡候所又候、四月ニ至五間半ニ而式丁御好ミ有之、左之段被仰遣候、五間半と申候而ハ格別ニ直段相増シ、それ共近辺ニ相見不申、拙者御役中江罷越随分直段高値ニ不相成様ニ者可仕候ハ共、間數御引詰メ可被遊様ニ申上候ハ、七月ニ至リ被仰遣候ハ四間半ニ被仰遣候、併御吟味被成候而留口ニ枝節等無之様撰木ニ而式丁被仰遣候、無是悲右九丁之内ニ而間數大キサ相増シ、直段仕直四間半式丁ニ付此代金四拾四兩、但シ卷丁ニ式拾式兩積リニ申上候ハ直段御意ニ入不申哉、彼是御定不被遊翌春ニ罷成候而も右之式丁何れニも不相定、度々御定被下候様申上候ハ此方見合杉ニ而成共いたし可申哉と御申被遊、先々式丁除置候而七丁差出シ候様被仰聞候、左ニ御座候而、木數大分相減、右買定候元木之内式丁捨木ニ罷成候而ハ積達ニ相成、金子都合殊之外惡敷難義ニ奉存候ハ、何分前書御定之通木數不相減無異方被差出候様度々申上候ハ共、御役中之以、御威光拙者申上候旨御申潰シ被遊、御聞濟不被遊川下ケ等増々延引ニ相成手間取り候程、拙者方之難義ニ相成候、是悲七本ニ而差出候様被仰聞候ニ付、無是悲木數相減シ候而去夏四丁差出御役中江相渡シ、殘三丁之儀も誤ケ者格別差出シ申度候而、七丁之代金九拾壹兩ニ都合仕御請取申候而、右三丁津出シ河下ニ取計候ハ共、木數相減リ候ハ三丁之分河下ケ諸懸リ之金子足り不申候而、川下ケ指滞リ罷有候ハ嚴敷御催促有之、正覺寺方ハ難渋被申懸甚難儀仕候、何分弁金いたし川下ケ可仕奉存候所ニ、去冬之儀者殊之外干水仕、時節之儀ハ寒中ニ差懸リ差働之もの無之候、左之詛正覺寺江申候ハ、正覺寺挨拶ニ者寺沢大長老様江右之段被申上、來春迄御申延被下候様被相願候ハ可相叶哉も難計と有之候ニまかせ、拙者同役七郎左衛門相頼同道ニ而、則大長老様江右之趣申上候ハ失墜之事御聞請被遊偏ニ以、御威光鎌倉御役中江当春迄之御申延被下候、此段拙者七郎左衛門方ハ正覺寺江申候ハ左ニ候ハ、向後拙寺儀ハ伐木一件ニ差構候義無之候杯と申候而悉立腹有之、江川太郎左衛門役所江喜左衛門召呼候而成共、御吟味を以過怠ニも冬中為差出候と権威ニ申掠メ且方江不殘相廻リ、途中迄も罷出候様承りおよび候、併御本山方御申延被下候御一言重ク正覺寺心ニ不相叶、当四月河下ケ仕候、一件申上候通相違之請合拙者ニ為仕ら候而、為及難儀ニ其上ニ而出入ニ申懸ケ甚去冬難儀仕候、右ニ申上候ハ出入ケ間敷御聞請御座可有候ハ共元來是方事発リ候ハ、旨意相分リ候ため左ニ申上候、此度拙者申上候者去冬正覺寺旦家半兵衛・源五左衛門・九郎兵衛・八兵衛・庄兵衛を以正覺寺ハ拙者方江被申渡候ハ、伐木河下ケ無之已前、今日方正覺寺江出入候事無用之理有之候、併且用之儀ハ差支候義無之候と急度申届ケ有之、怠案之私得と其意相心ハかたく候ハ共、大金之請合ニ取懸リ居り候故其旨相尋候儀差控江、無是悲出入被差留罷有候、右鉢正覺寺方過怠ケ間敷可有之儀ニ聊不奉存之所、心外之理菩提孝心も不相立、次二世ノ仁口も難計向後何様之儀可被申懸も難計、拙者代々正覺寺旦家ニ御座候ハ離旦仕候義殘念ニ奉存候ハ共、無是悲此度離旦之願依而右一ヶ条差出シ申候、然上ハ何れの旦家ニ成共、御尊前任御意拙者違背之儀無御座候、何分正覺寺御召呼被遊御吟味之上離旦被仰付候様願上候、勿論正覺寺挨拶ニまかせ子細左ニ口上ニ可申上候、右申上候所聊相違之儀不申上候、何分正覺寺御召呼被遊対談御申付被下候ハ、委細於、御尊前乍禪口上ヲ以誤相分リ候様可申上候、菩提旦家之出入一目たりとも被差留メ可相濟儀ニ不奉存候、前書申上候趣御聞請無御座候ハ、左ニヶ条ヲ以出入ニ申上候而なり共何分離旦仕候、不勝手之拙者ニ御座候ハ離旦之願ニ而出入ニ不被成様相濟候上者、幾重ニも御本山様御夷光と奉存候、以上

寸沢嵐村鼠坂

喜左衛門 印

明和三年戌六月

雲居寺様

御役中

鎌倉建長寺山門柱十二本の内、二本は御用意済みなので十本正覚寺の方で世話する様、度々建長寺の方から遣いがあつた。依つて伐り出しするに於いては注文を以て、値段を決め伐りだす様、名主喜左衛門に正覚寺方連絡があつた。建長寺からは正覚寺と一緒に来て値段等の注文する様言い渡され、建長寺へ赴いた所、喜左衛門方でお金は調べ、由比ヶ浜へ柱が着いた時点で代金を受け取るか、山入の時、入用次第に度々代金を支払するか、そちらの方が値段も少々安くなる旨、御勝手次第で良い方へ御定めくれる様申上げると、金子は山入の時、入用次第で御渡しする定めとなつた。由比ヶ浜着で十丁代金百三十兩、但し一丁付十三兩の證文を差し出すと値段は納得され、正覚寺立会いの加判證文を以て喜左衛門が伐り出し請け負う事となつた。だが、十丁の内一丁が江戸より寄進の心当たりがあり九丁の請負予定である。冬中に準備し来春にはお届けする予定である。本證文には木数や金高については触れない様仰せ聞かされたので、木数金高は記入せず、但し一丁に付十三兩とだけと承る事となつた。来春になり木元買定めの時、飛脚を建長寺へ遣わすと、木数は一丁やはり寄進があつて九丁の請負に決定され、木元買定めする様申し渡された。右の様に木数木元買定めて内金等渡し終わる事に成ると、今度は四月に成つて五間半の長さの柱木のご希望があり、五間半となると格別の高い値段となり、それに近辺には見当たらず、喜左衛門が御役中を訪ね値段が高く成らぬ様考えますが、間数を引き詰めてくれるよう申上げると、七月に成り四間半の物と仰せ遣わせられた。併せて御吟味成されて留め口は枝節が無い物を二丁仰せ遣わされた。止む負えず右九丁の内、間数大きさを増しての値段で、四間半二丁の代金四十四兩、一丁に付二十二兩と申上げると値段に納得されないのか御定めに成らず、翌春に成つても二丁については定まらず、御定めくれる様申上げるとそれに見合つた杉ならどうかと申された。先々二丁除き置かれ、七丁差し出すとなると木数が大分減り、すでに買定めた元木の内二丁捨て木となり見積り違いとなり、金子の都合がつかなくなると思われるので前書御定めの通り木数減らさず、変わりなく差し出させ下さる様々申上げ、御役中の御威光を以てとお願いしたが御聞き入れなく、川下げは増々延引きになり手間取り、私の方で困っていると、是非七本にて差し出す様仰せ聞かされ、是非無く木数減らして去る夏四丁差出し、残り三丁も訳は兎も角、差出し申し度く七丁の代金九拾壹兩に都合し請取、右三丁津出し川下げに取り掛かつたが、木数が減り三丁の分の川下げ諸掛金が足らなくなり川下げが滞ると、今度は厳しい催促があり、正覚寺よりも難渋を申し掛ければ甚だ難儀に及んだが、金を準備し川下げしようとした。しかし、去年の冬は渇水でしかも時節柄寒中となり働く者も無く、この訳を正覚寺に話すと、寺沢雲居寺の大長老(大雲禪無様)申し上げ来春まで延ばしてくれるようお願いすれば叶うかどうかとも言われたが、計り難く私は七郎左衛門と一緒に雲居寺へ

右の趣申し上げると失墜の事お聞き請け下さり、御威光を以て鎌倉御役中へ当春までの申し延ばしをお願いしてくれた。この事を七郎左衛門を通じて正覚寺へ伝えると、今後拙寺は伐木一件に関わらないなどと申し悉く立腹し、江川太郎左衛門御役所へ喜左衛門を召し呼び御吟味させ、過失を以て冬中差し出させる様、権威を以て檀那方へ残らず廻り、途中までも出す様に触れ回した。しかし、御本山よりの申し延ばし下さると言う一言は重く、正覚寺の心に叶わず当四月に川下げをしました。一件申し上げている様に約束の違いを私にさせられ、難儀に及ばされ其上に出入りにまで申し懸けられ、去る冬は容易ならぬ事でありました。右に申し上げた様に、出入りのような問題では無く、事はこの事より起こりその理由も分ったことを申し上げると、去る冬正覚寺檀家の半兵衛、源五左衛門、九郎兵衛、八兵衛、庄兵衛より私に申し渡された事は、已前、正覚寺催促の言われた通りに伐木川下げもしなかつたので、今日より正覚寺への出入りは無用であり、併し、且用の儀はこれに限ら無いと言う厳しい申し届があつた。愚かな自分よくその意を固く受け止めているが大金の請け合いに係わつていたので、詳細を訪ねることは控えていると、止む無く出入りは差し留められた。右正覚寺より何か手拔かりが有つた様な事は聊かも存せず事で、心外でもあり菩提心も湧き立たず、世間の噂も計り難く今後どのような申し懸があるかも計り難く、私は代々正覚寺の檀家であるので離檀する事は残念でなりません。しかし、此度は止む無く離檀の願を出しました。然る上は何処の檀家に成ろうとも御尊前(大雲禪無和尚)の御意向にお任せし、何分正覚寺を御召し呼び、御吟味により離檀を仰せ付け願いたい。勿論、正覚寺の言動の詳細は左に口上した通りで、聊かの相違は御座いませぬ。何分正覚寺を御召し呼び対談され御申し付け下さり、御尊前の口上で諭す様お願い致します。菩提檀家の出入り一目たりとも留め相済むべき事でもないので、前書の申し上げた趣、御聞き請けられないのであるならば左のケ条を以て出入りに申し上げ離檀します。不勝手な拙者であるので離檀の願にて、出入りには成らないで済むならば、幾重にも御本山(建長寺)様の御威光と感謝奉ります。以上

寸沢嵐村鼠坂

喜左衛門 印

明和三年戊六月

雲居寺様 御役中

*津久井の狸和尚伝説

・相模湖小原本陣の清水家には狸和尚が書いたと言われる「東山壽不鷲不崩 天明元年」の掛軸がある。本来は禪語として「東山」は「南山」が本当なので、偽坊主が書いた狸和尚書とされる。小原本陣は前記している様に正覚寺「狸和尚伝説」

と縁深い関係ある場所である。

・相模原上磯部の川崎家に「南無阿弥陀仏」と書かれた掛軸があり、建長大雲の落款がある。草書体の太字で書かれ狸の尻尾で書かれた様な文字で、今でも余程の書に通じた人でないと南無阿弥陀仏とは読み難い。最近まで大雲なる僧の正体も分らなかつたが、筆者の調査の結果、この大雲は山門化縁主・萬拙和尚の次の建長寺住持、第二百二世の大雲禪無和尚（根小屋雲居寺住持でもあった）である事が分つた。川崎家の菩提寺は曹洞宗で、何故、曹洞宗の寺に臨済宗建長寺住持でもあり津久井雲居寺の和尚が、しかも異宗派の浄土宗の名号「南無阿弥陀仏」を書いたか。この様な不思議な関係から此の地では「貉和尚伝説」として、最近「貉坊主」という題名にて紙芝居にも成っている程である。

*狸和尚の化首

・前記一の「正覚寺と狸和尚伝説」にもある様に、寺男に斧で切取られた和尚の首は、籠に乗せられ正覚寺へ運ばれたが開けて見ると「人面石」に変わっていた。その狸和尚の人面石は本堂西の間奥座敷にある。座つて持ち上げようとしても重くて持ち上げるには余程の力がある。持ち上げる事ができる人は病氣も治り、幸運が廻らされる云われる。但し、ぎっくり腰に注意を……。

三、柳田国男の内郷村調査

*現在の相模原市緑区の若柳、寸沢嵐地区は戦前は内郷村と呼ばれていました。そんな内郷村で日本全国最初のフィールド調査が『遠野物語』で有名な柳田国男によって行われました。その調査に際して正覚寺は宿泊寺として使用されたのです。宿泊した本堂は今も当時のままで、その頃の生活を偲ぶ事ができます。内郷村調査に於いては、柳田国男と親交の深かった当村の内郷小学校校長で、郷土史家の長谷川一郎氏と同じく郷土史家の鈴木重光氏が係わり、両氏の名前を忘れる事はできません。

○内郷村調査について

*郷土会

・郷土会は明治四十三年（一九一〇）発足。柳田国男は幹事として働き、その中には新渡戸稲造もいた。例会は新渡戸邸で行われていた。

・大正七年（一九一八）八月十五日から二十五日までの十一日間、柳田国男を中心とした郷土会と白茅会の両会員の一行十二名が正覚寺を宿泊所として調査を行った。大正六年六月の郷土会例会席上で調査計画決定。一年以上の準備を経て、内郷村フィールド調査が実行された。

*内郷村選定理由

・大正七年四月二十七日、貴族院書記官長柳田国男が富田光雄書記官以下院内事務局員全部四十名と武相国境大垂水層雲閣に一泊。長谷川一郎共に宿泊し相模川沿岸の名勝旧跡を案内し、柳田国男と交わる様に成る。
 ・大正七年五月十九日、津久井郡教育会第三部企画の三国山登山があり、長谷川一郎校長のもと柳田国男も参加し、総勢二十六人で佐野川の三国山登山をする。

・当初は古跡伝説に富む藤野佐野川村（現緑区佐野川）に白羽の矢を立てが、同村に関する「新編相模国風土記稿」の記述が余りにも架空なものである事に愛想を尽かし、内郷村で実施したと伝えられる。

・大正七年七月二十八日に、内郷村調査に際し、内郷村有志者の助力を得べく、内郷村役場より打合せの会議連絡が有志者があり、その際には押田未知太郎村長、長谷川一郎、鈴木重光等が、来村した柳田国男、小野武夫と打合せをした。
 ・内郷村が調査対象地に成った他の理由として、内郷村への地形的・地理的関心と内郷村に長谷川氏と鈴木氏という人脈があつた事が上げられる。

・『相州内郷村話』では「全体最初に内郷村を選定しましたのは、一つは地形、即ち一方の境は高い嶺、他の三方は絶壁を以て川に臨み、近年まで橋も無かつたと云ふ弧存状態と、第二には村長校長其他の有力者に、同情と理解が有つたのが主たる誘因で、実は此程迄に文書類のよく保存せられて居る村とは知らずに出かけた。」と柳田国男は書いている。

・「内郷村は三百七十戸程の小村で相模川と道志川とで三方を囲まれ一方は高い山に境されて明瞭に一区画をなし総べてが一村で纏まつて居るから研究には頗る都合がよいこれが此の村を選択した一理由である」（東京日日新聞）

*内郷村調査

調査期間

・大正七年八月十五日より二十五日の十一日間である。宿泊所は若柳村山口の正覚寺で、本堂西側二室（十二畳と八畳）が研究室とも応接室ともなつた。東側の二室（十六畳と八畳）は食堂、夜は寝室となり、西側北角の床間と押入れは各自所持品の置き場所となつた。南端の縁側の壁には日記を記すべき奉書の白紙が貼られる。

参加者と役割（『聚落と地理』小田内通敏著）

・郷土会より ①柳田国男（貴族院書記官長）―沿革、②草野俊助（農科大学教授理学博士）・③正木助次郎（東京第三中学校教諭）―天然と土地、④石黒忠篤（農商務省書記官）・⑤小平権一（農商務省書記官）―農業其の他の生業、

⑥小田内通敏(大倉研究所)―衣食住、⑦小野武夫()―社会生活、⑧牧口常三郎(東京下谷東盛小学校長)・⑨中桐確太郎(早稲田大学文科教授)―教化及び衛生、⑩中山太郎―俗伝、⑪田中信良(鉄道院参事)―蚕室、⑫中村留二(農商務省技師)

白茅会より ⑬佐藤功一(早稲田大学工科教授)・⑭今和次郎(早稲田大学工科教授)―建築、(数字は来村者数を表す)

八月十五日参加者 柳田・草野・正木・牧口・中桐・佐藤・今・田中・小田内 計九名

中村留二は三、四日間で帰る。石黒忠篤は調査終わりの二日ばかり来村する。

正覚寺及び村の生活『聚落と地理』 小田内通敏著)より

一行の閉口したのは寺僧の規則正しい早晩四時半の読経であった。初めの一日二日は早起きが出来ていゝなどと負け惜しみ言っていたものゝ、三日目にはもうそろく愚痴が出てきた。四日が五日になると。昼間の作業が大分身にこたえるようになり、今朝は珍しく読経がなかったようだ。多分寺僧も我々の勉強に免じたであろうなどと言う声もして来た。しかし日中は終日野外を踏査し、毎晩十二時まで議論し談話して四時半に起こされるのだから、読経を休業と誤る連中が出るのも無理はない。佐藤君などは滞在中胃腸を害したのを無理に終りまで居たので、帰京してから一時危篤状態に陥るほどの大患いであった。

寝具の取片付から室の掃除茶器の上げ下げ戸締りまで、連中の働く事は一通でない、柳田君は「自宅でかくまで働いたら妻君定めし満足だろう」などと言って笑われた。

調理といへば初め一日二日は朝から晩まで、全く麩と唐辛子で我慢したが、三日目になるとそろく各自持参の福神漬が出る大和煮がでる。時々東京からの仕送りに安堵した。

東京の方々が村を調べに御出でになるといふ話だけでも、正覚寺に寝転んでゐて、鮎猫でもするのが関の山せうなどと村民は噂をしていた。

内郷村調査の新聞記事

「村では初めての事だから、お奉行様御巡視と云った調子に我々の出張を印象したらしかった」(『東京朝日新聞』)

「一行は毎日朝は露を踏んで夕は星を戴くまで村の小道や小川や林を尋ねて全くお宝でも探す様に石ころ一つも見落とすまいと云う熱心さに村の衆は再度吃驚の声を放った」(『東京朝日新聞』)

「学生時代の様な旅行をしたのは十何年振りだったでせう。柳田氏は愉快な笑顔に崩れて、最初食べ物は皆お向ふにまかせきりにしたのですね、処が丁度南瓜の良い時季なので、最初の晩飯に出たのが麩に南瓜のお汁です何しろお腹が良く空いているから美味しいのです、処が其の翌朝もやっぱり麩と南瓜、又其晩も麩と南瓜そして其の翌朝も麩と南瓜、それから何でも豆腐と南瓜に成りましたがね。何しろ東京ではかなり紳士生活の連中

ばかりですから好い修養になったでせうよ」此処まで話を持ってきた柳田さんはホツとした様な顔をする…。」
 (『東京朝日新聞』)

・「柳田書記官長を始め十人許りの学者蓮が…此の程神奈川県片田舎に農村研究に出掛けた、或養蚕村に落付くと寺に本拠を構えて村の田吾作連を相手に研究に執り掛かゝると時恰も米騒動が起こつて村の米が段々心細くなり中には『都の学者先生も有難いが十人もの人に十日間も居食ひをされては今に村の者が干乾しに成る』と心配した老人もあつたと…。」(『東京朝日新聞』)

・内郷村調査終了の帰京の際、正覚寺へ柳田国男は次の句を遺したと伝えられている。

山寺や葱と南瓜の十日間 国男

内郷村調査報告

・大正七年九月二十一日、郷土会例会席上での内郷村調査報告では「他の会員の報告は依然として雑話なり、少しも学問的に非ざりし」と柳田国男は日記に記す。(『定本柳田国男集 別巻四』「大正七年日記」)

・「非常に面白かつたけれども、我々の内郷村行きは学問上先づ失敗でありました。面白かつたとは言ひ得ますが、有益であつたとは申しにくい。其失敗の原因は至つて単純で、勿論我々の怠惰不熱心の為ではない。一言を以て言えば、問題を多岐に失して順序と統一の無かつたこと、学び得る事は何でも学ぼうとした其態度が悪かつたのです…。」(『定本柳田国男集 二五巻』)

・柳田国男は調査者の資格として「所謂心にくい客人である為に謹慎して、したい顔もせぬようであつては、言はゞ三分の一の面会謝絶と同じです。殊に我々の団体見たやうに、口髭の秀麗な人人がぞろくと繋がつてあるいは、如何程猫撫声を出しても、問答の渉行かなかつたのは当然であります。」(『定本柳田国男集 二五巻』)

・郷土会は大正七年の内郷村調査後、存続について例会での議論があり、大正八年三月、新渡戸稲造が西欧に飛び立つ事により急速に消滅の道を進んで行つた。

*調査時の正覚寺

・調査時の正覚寺住職は明治三十九年十月十日住職となつた、第二十一世・光庵玄猷和尚(昭和十四年十月十八日示寂)であつた。内郷村調査時の十日間で軍艦河内の殉難者の空葬があつた。(『定本柳田国男集 一五巻』)葬儀に際しては光庵玄猷和尚が導師を勤めた事であろう。

・「二行の閉口したのは寺僧の規則正しい早暁四時半の読経」とあるが、この寺僧とは光庵玄猷和尚である。

・光庵玄猷和尚には長男であり、後第二十二世正覚寺住職と成る亮因和尚がいたが、亮因和尚は当時の大正七年には明治四十二年(一九〇九)生まれであるので十歳であつた。

亮因和尚十歳の時の記憶

・「当寺は柳田さん等について廻り、調査に出掛けた後の部屋へ出入りしいたずらをした。父光庵玄猷和尚は明治五年生まれであった。日清・日露の戦争から帰り住職と成り、柳田さんの調査時は五十歳近くであった。父は軍人で落馬し怪我をし、打撲性リユーマチがあり、大正七年頃は発病し治療中で湯治に行ったり、寺に居たりという生活であった。田中信良（鉄道院参事）については、与瀬の駅長がよく使いものを持ってきて届けてくれと云われた。農村調査の宿泊場所に成った経緯は父が長谷川さんと懇意であったから私の寺に目を付けられた。父は日露戦争が終わって内郷村の初代在郷軍人分会長であり学校長の長谷川さんと付き合いがあった。調査時の食料は長谷川一郎さんが在所の傍の長谷川久さんという人が来て賄をしていた。調査へ行った後のテーブルにはキャラメルが転がっていて失敬して食べた。夜は遅くまでランプの下で調べ物をしていた。亮因母・カズノのいう事には、長谷川さんが寺を宿泊場所にしたいと頼みに来た時、一度はお断りをした。父もリユーマチで大変だという理由で：長谷川先生は、なーにいうとる、彼らはしょっちゅう旨いものを食うとるんだからそんな心配はいらんとか、寝るといっても夏の事だから何かにくるまって眠るんだらうから、そう心配しないで泊めるだけ泊めてくれということで、泊める事に成ったらしいといった。調査での十三夜の石碑とか百万塔、道祖神ある場所へ子ながら案内した事もある。鈴木重光さん長谷川一郎さんは夫婦の如くで、夜は自宅へ遅くなって帰り、朝になると朝飯が済む頃やって来て、調査一行の御案内をしていた。柳田先生が正覚寺へ来た時、羊の毛でできた襟巻をお土産に持ってきてくれた。また母は鹿の皮の模様であったガマガチを貰った。その時には中味を入れなければ、種の無い物をあげては失礼ということで、二円の手の切れるような札を入れてもらったとの事。寺へ立ち寄ると父の病気を察して身体の具合はいかがですかと気遣ってくれた。正覚寺へは調査の前後に一回来て、母が財布を私が襟巻を貰った時は奥さんも同伴であった。今考えると、皆さんが色々調べているので、柳田先生という人は偉い人なんだなあと思うと、それらのお土産を取っておけばよかったと思う。鈴木さんは奥畑から下駄を履き袴で来た。長谷川先生は学校の先生だから洋服だった。調査の人達では中村さんという農学博士は、タイかベトナムかあつちへ行つて帰りましたということ、香木を戴いた事がある。お寺さんだからお使いになるでしょうということ。今は何処へ行ったか分からなくなってしまうている。」

四、正覚寺の首廻達磨

* 八方睨み達磨や七転八起達磨はあるが、正覚寺の「首廻り達磨」は珍しい。達磨の描かれた掛軸を見つめながら左、真中、右、又は右、真中、左と部屋の中で達磨さんの目を睨みつけながら移動すると、あら不思議、自然に達磨さんの目もこちらを睨みつけながら移動してきます。つまり何処に立っていても達磨さんの目はその人の目を睨みつけています。

* 正覚寺「首廻り達磨」は良く首が廻るといふ事で縁起物となっています。そして、昭和平成の不況時代、この達磨さんは救いの達磨さんで、金運の廻りの悪い人や借金で首の廻らない人、そして、病氣や怪我で首の回らない人が、この達磨さんと睨めっこをすれば首が廻り始めるという事で人気な達磨さんとして親しまれています。

* 落款には「七十九叟吸江拝写」と書かれ、隸書の山号もありますが、禅僧である事は間違いありません。作者についての詳細は不明です。

化首と首廻り達磨や夏涼し

児草

経文で描かれた観音様

* 首廻り達磨左隣には「観音様の掛軸」があります。これは正覚寺の前第二十二世亮因玄妙和尚（俳号・咲花）が幼青年期から病弱であった為、病氣平癒を願ってお経の「観世音菩薩普門品第二十五」の経文字を一字一字書写し、一生懸命描き上げた大慈大悲の聖観音様の掛軸です。そして、亮因和尚は病弱ながら百歳の天寿を全うしました。皆様もご長寿、ご健康、病氣平癒を願って拝顔し、一生懸命拝めば病氣も治りますよ。

五、正覚寺の五色椿と散椿

五色椿

* 神奈川の名木百選や相模原市天然登録の一つに選ばれており、四月中旬から五月初旬迄、一本の枝木から「赤」「白」「ピンク」「赤白」「赤ピンク」「白ピンク」と探せば六種類の椿の花が咲きます。神奈川県下には天然の五色椿としては唯一の物で、非常に珍しい椿です。この椿は正覚寺が元屋敷の火事でここに移転された、今から二百五十年程前、中興開山となる第十六世義海玄仁和尚が左にある「散椿」と共にこの地に植樹しました。尚、二百五十年程前の五色椿は平成二十四年枯れてしまい、先住亮因和尚が挿し木して育てた二世が、今この様に大きくなり、古木と変わらぬ五色の椿の花を咲き分けています。

散椿

*階段を挟んで「五色椿」の対面には、これも二百五十年程前、中興開山義海玄仁和尚が植えたと言われる散椿（樹齡二百五十年）があります。普通一般に椿の花は首から花が落ちてしまうのですが、この「散椿」は花が根元から落ちる事無く、花弁が一片一片、ひらひらと舞い落ちると云う珍しい椿です。その為に椿の花が散り始める頃は、花弁で地面が覆われて、恰も絨毯を引き積めた様になります。ぜひ一度椿の咲く頃の、四月初旬〜下旬に御来寺下さい。

空即是色咲き分けし椿かな

咲花

六、正覚寺の木洞地蔵

*本堂西側に大櫛が二本ありますが、その枯れた大樹の中腹（三辺）の切り口に地蔵様が立っています。このお地蔵さんは、以前は西行法師の歌碑「吾妻路や間の中山ほどせばみ心の奥の見ゆばこそあらめ」の傍にあった五百年の大櫛の空洞の中にあり、その中に祀られていたお地蔵さんです。このお地蔵さんは先住亮因和尚が病氣平癒を願って作成しました。このお地蔵さんは大櫛に吞込まれ、珍しい事もあり、「正覚寺の木洞地蔵」としてNHKテレビでも紹介されましたが、平成十年一月十五日の大雪で大櫛が倒れてしまい、現在の地に奉納しました。尚、現在の大櫛の根っ子には蝦蟇蛙が安置されていますが、この蝦蟇蛙も大櫛に吞込まれてしまっています。

櫛落葉思惟を幾世に木洞仏

鏡水

七、正覚寺名勝滝つつじ

*正覚寺境内には、つつじが約千本程植樹されていますが、四月下旬から五月の初旬にかけて、これ等のつつじが咲き誇るとそれは見事なものです。名勝「滝つつじ」は本堂西北の駐車場付近にあります。白つつじが約百本ほど山号・大智山と言われる山の頂上から百段に渡って、下る様に植樹されているので満開になると、恰も滝が流れ落ちる様に咲き誇ります。つつじの咲く頃、特に五月のゴールデンウィーク前頃から咲き始め、多くの方がこの滝つつじを見る為に正覚寺へやってきました。正覚寺では広告・案内等は一切しないのでまだまだ知らない方も多いですね。花の咲く頃は、遠方より「滝つつじ」の開花状況を知りたくて、電話の問合せが多くありますが、相模湖近辺は神奈川県でも寒い地方なので東京・横浜でつつじが散ってしまった頃、こちらではつつじの咲く頃と考え

御訪寺頂くと良いかと思えます。

* 正覚寺境内には、この滝つつじの他に「回向の鐘」という十一面観世音菩薩を奉った梵鐘がありますが、この下に観音様の大慈大悲の眼を模した「慈眼つつじ」があります。満開になると斜面に眉毛と両眼がある様な形に見えて来ます。

見にあびるしぶきはあらし滝ツツジ

みゆき

八、御釈迦様と十八羅漢巡り

* 正覚寺では、明治四十年頃まで羅漢様の描かれた羅漢絵図があり、「羅漢講式」と云われる羅漢様のご供養をする法要が毎年行われていました。しかし、残念な事に大正末期の不景気恐慌時代に寺院も荒れ果て、台風にも襲われ大事な羅漢絵図も消失してしまいました。この様に正覚寺は歴代より羅漢様とは非常に縁の深いお寺でありました。

* 羅漢様は十六羅漢や五百羅漢様がありますが、これ等の羅漢様をお参りしていると、故人の夫や妻子、祖父母、親類縁者、そして友人等によく似た羅漢様と出会う事があります。そんな事もあって「故人との対面」の機会を得られるという事で多くの信者さんから羅漢様が信仰されています。

* 大智山の滝つつじの咲く山から、回向の鐘の山に渡って羅漢様が建立されています。滝つつじの山の中腹には羅漢様の師でありますお釈迦様の石像があります。身の丈三トナリほどりですので駐車場や本堂の裏廊下からも拝顔する事ができます。

羅漢とは

お釈迦様の御弟子達で私達と同じ人間であります。かつては煩惱を持つ凡夫として悩み苦しんでいました。縁あつてお釈迦様の教えに接してお釈迦様の御弟子に成りました。そして、教えのままに精進修行してついに煩惱から解脱した方々なのです。

正覚寺十八羅漢

- | | | | |
|--------|----------------------|-------|--------------------|
| * 第一尊者 | 寶度羅跋羅墮闍(ひんどらばらだじゃ)尊者 | 第二尊者 | 迦諾迦伐蹉(かなかばつさ)尊者 |
| 第三尊者 | 迦諾迦跋釐墮闍(かなかはつりだ)尊者 | 第四尊者 | 蘇頻陀(そひんだ)尊者 |
| 第五尊者 | 諾矩羅(なぐら)尊者 | 第六尊者 | 跋陀羅(ばつだら)尊者 |
| 第七尊者 | 迦理迦(かりか)尊者 | 第八尊者 | 伐闍羅弗多羅(ばしやらほつたら)尊者 |
| 第九尊者 | 戍博迦(じゅはくか)尊者 | 第十尊者 | 半吒迦(はんたか)尊者 |
| 第十一尊者 | 羅怛羅(ら)尊者 | 第十二尊者 | 那伽犀那(なかさいな)尊者 |

第十三尊者 因揭陀(いんかだ)尊者

第十五尊者 阿氏多(あした)尊者

第十七尊者 大迦葉(まかかしよう)尊者

おびんずる様

*特に一番の賓度羅跋羅墮闇の羅漢様は、「おびんずる様」と云われ、信者の身体の具合が悪い所と、同じおびんずる様の身体の個所を撫でると、自分のその個所が治癒して元気になる云われ、多くの方に親しまれています。

*第一の「おびんずる様」は、偶然にも正覚寺の先住・亮因和尚(俳号・咲花)にお顔が似ていて驚くほどです。また、亮因和尚(経文で描かれた観音様参照)は幼少病弱でしたが、何と百歳の天寿を全うしています。この様な事もあり評判の羅漢様で、羅漢様は必ず誰か家族や親戚、友人に似ると云われる事は本当かも知れませぬ。御参拝ください。

正覚寺羅漢様の原画

*正覚寺の石像十八羅漢様の御姿の原画は、緑区津久井の光明寺にある県指定の十六羅漢絵図を模写したと云われる町田市に有る臨濟宗建長寺派宝泉寺(鬼頭住職)所蔵の十六羅漢絵図で、町田市指定文化財で、島崎旦良作と成る江戸後期の羅漢絵図がモデルと成っています。

九、境内句碑巡り

*昭和四十八年頃、先住亮因和尚(俳号・咲花)が発願し、相模湖俳句会や藤野俳句会の俳句寺構想への賛同を得て、句碑が建立される様になる。地元の俳句会の会員の句碑は、川原石等へ句を刻み、俳句寺の礎となるべき大智山の滝つじの山へ担ぎ上げ建立された。これが元に成って境内へは正覚寺で吟行句会を催していた俳句会や、咲花和尚の各地で活躍の句友の皆様へ正覚寺への句碑建立案内葉書の送付などをして、境内への建立が盛んに行なわれる様になった。

*俳句寺構想には、大正七年八月十五日から二十五日迄、柳田国男が正覚寺に宿泊し、わが国最初のフィールド調査をして帰り際に「山寺や葱と南瓜の十日間 国男」の句碑を遺していった事や、西行の歌碑「吾妻路や間の中山ほどせばみ心の奥の見ゆばこそあらめ」の歌碑がある事、咲花和尚が昭和の初期、内郷村青年団の機関誌の編集等を行い、俳句投稿などもしていた事等が俳句寺構想の出発点となった。

境内句碑建立について

*句碑建立は有名無名を問わず誰でも建立は可能です。金婚式、銀婚式、夫々の句会でトップ賞を記念して個人が、或いは家族の方々が建てられた句碑、ふと正覚寺に立ち寄り建立を希望された方、俳句結社一同で大きな石に合同で句を刻み

建立

された結社や個人など様々です。

* 句碑建立は駐車場に展示されている石を見て、予算にあった石を選んで建立が出来ます。また、地元に適当な石があるならばそれを持参して境内建立も可能です。正覚寺では管理料は取りませんが、建立の際の句碑の開眼時、お経を読んで入魂式を行いますので開眼の供養料を頂くだけと成ります。建立場所は境内を管理する住職が大きさや景観を考えて、場所を選定します

* 平成二十七年現在、句碑は二百四十基と成っています。「句碑建立者一覧表」があり、これに建立者の年月日や名前が載っていますので、この番号と建立句碑に掛かれた番号と照合する事により建立者の詳細が分ります。

* 正覚寺のホームページもあり、「俳句寺」で検索すると、俳諧浄土寺・臨済宗正覚寺・俳句寺の詳細を見る事ができます。勿論、俳句寺についての内容も盛りだくさん掲載されていますので、そちらのホームページもご覧ください。

句碑祭俳句大会

* 毎年四月三十日は、恒例の「正覚寺句碑祭俳句大会」が本堂で開催されます。俳諧浄土正覚寺へ句碑建立されている方に呼びかけて当初は開催されました。現在は第三十七回と成っていますが、現在は参加は自由で、建立されていなくても句友なら何方でも自由参加できます。

* この大会で最高点の方は、副賞として代々最高点受賞者の句と名前が記載されている石碑に、栄誉として句が刻まれる事に成ります。但し、一度受賞し石碑に刻まれている方は、二度目最高点受賞の場合には、石碑への刻みは他の方に譲る事になっていきます。

十、回向の鐘

* 回向の鐘は、元は相模湖畔を一望できる「尾房山」と言う所に建立されていました。この尾房山には先住の亮因和尚が発願し、有志者の御協力を得てすでに昭和二十八年頃に「相模湖観音堂」が建立されました。その傍に二十九年の春、梵鐘の建立を計画し、翌昭和三十年五月、此の地に鐘楼堂と共に「回向の鐘」が完成されました。その目的は、人造湖である相模湖築造に際し、住みなれし有史以来の墳墓の地を去る八十余戸の将来の福祉を願い、湖底墳墓の改葬諸霊位やダム築造工事殉職者の霊、ダム完成以来の水難諸精霊供養の為に、回向の鐘として完成されました。

回向の鐘の意味と由来

* 「相模湖築造工事殉職者の霊、湖底墳墓の精霊(湖底に沈んだ勝瀬集落)、麻布学園中学遭難学徒の霊、その他有縁無縁

の水難者の霊を供養し、水の有難さに感謝し、梵音を以て環境を整え、人心を浄化し仏果を願う為建立……と鍾銘に刻まれている。御参拝者が清浄心、慈悲心、感謝の心を以てこの鐘を撞くと、いつしか「回向」となり、自分に幸福や幸運が廻らされてくると云う有難い梵鐘です。また、回向の鐘には「十一面観世音菩薩」が刻まれ奉納されています。

*梵鐘の凶案作成者は、今は亡き人間国宝であった「香取正彦」先生で、香取先生が若い頃、最初に手掛けた梵鐘の一つと云われています。それ程今では貴重な梵鐘と成っています。(富山県高岡市 老子製作所製作)

麻布学園中学水難事故

*回向の鐘建立計画中の昭和二十九年十月八日、相模湖で東京の麻布学園中学二年生、六十八人の内二十二人が死亡すると云う「内郷丸沈没水難事故」がありました。亮因和尚もこの時は、率先して仏教会の方々と湖畔に出向き中学生の供養に「声なきお経」挙げ、ご家族の方々の慰安に勤めました。そして、この水難事故の三回忌に地元相模湖町の北相中学生が発起し、麻布学園中学生供養の為に「慰霊塔募金」が始められ、相模湖観音堂の傍に二十二童尊の慰霊塔が建立されました。

*平成三十〜五十年代は、相模湖や嵐山への観光客や、相模湖を見下ろす景観地にある「回向の鐘」、「相模湖観音堂」、そして「二十二童尊慰霊塔」への参拝客が多くありましたが、これも時代の変遷により、尾房山の景観地の周辺までが相模湖ピクニックランドの用地に変わり、観光客や参拝客の訪れる事無き状況となりました。先住和尚は「回向の鐘」移転の計画を進め、建設当初の協力者の期待を無にする事に偲びつ、ここに昭和五十六年十月正覚寺境内に移転する事を決意し、永久に梵鐘の由来を後世に伝承し、以つて幽明に梵音を供養せんとされ、その年の十二月には現在の地に正覚寺「回向の鐘」として移転再建立がなされました。

二十二童尊慰霊塔

*水難事故で亡くなられた麻布学園中学二十二名を供養する塔「二十二童尊慰霊塔」については、相模湖ピクニックランドの親会社の三井物産K・Kには、麻布学園卒業の関係者やご遺族の縁故者もあり、慰霊塔は相模湖ピクニックランドの用地内に移転され、相模湖の水難場所を一望できる閑静な地に移築され供養されています。尚、相模湖ピクニックランドも現在は富士急行K・Kの下「相模湖プレジャー・フォレスト」と名前も変わりました。

*麻布学園中学遭難事故からすでに六十年近くに成ろうとしています。毎年祥月命日には麻布学園から先生達が此の地を訪れ、亡き二十二童尊に香を手向ける供養が為されています。また、その後正覚寺に立ち寄り二十二童尊の位牌にお参りし、尾房山では慰霊塔の傍にあつて正覚寺へ移転された「回向の鐘」をお参りしお帰りに成っています。また、麻布学園中学内には、創立百周年記念事業の一つとして当時の痛ましい水難事故と、犠牲者二十二名の交友を永遠に忘れない為「相模湖記念室」が作られているとの事です。

万緑に撞木のゆれを残しけり

ゑいじ

十一、正覚寺の道祖神

*夫婦の神像と自然石の陰陽石がある。夫婦の石神像はこの地では三体ほどしかない珍しい石像である。自然の陰陽石は男根と女性器の形状をしていて、拝むと子宝に恵まれるという。すぐ傍には「庚申塔」、「四国・西国・坂東・秩父廻国供養塔」、「百番供養塔」、「水子地藏」、更には他阿の「南無阿弥陀仏」念仏塔もある。これらは共に道祖神であり賽の神で、他集落から襲い来る疫神悪霊などを村境や峠、辻、橋のたもとでくいと留める義がある。

*道祖神群の下は、「信玄道」と云われ、永禄十二年（一五六九）十月、小田原北条軍と甲斐の武田信玄が三増峠で合戦し、武田軍が勝利し、甲斐へ引き上げる時、通行したと云われる道で、又は鎌倉への道「鎌倉街道」とも云われている。

薫風や人の創めの石の神

可山

四季俳句

一筋の風がみどりをこぼしゆく

正峰

初蝶やいのち溢れて落着かず

春一

男坂登れば浄土蟬しぐれ

竹風

紅葉山心の通うまで登る

花枝

大雪や立往生の百の句碑

ヤス